

資料 Data

## 第4回企画展『里山のめぐみー生物多様性を育む世界ー』における 来館者アンケートの結果について

橋本知佳<sup>1</sup>

Results of a Questionnaire for Visitors to the Fourth Special Exhibition,  
“A Natural Blessing of Satoyama: the World Coexisting with Biodiversity”

Chika HASHIMOTO<sup>1</sup>

**要旨：**今日の生涯学習社会においては、「地域に開かれた高等教育機関」として大学の地域貢献が強く期待されている。そうした中で、特に公開施設である大学博物館が果たす役割は重要になっている。広島大学総合博物館でも、地域の住民を対象とした活動を多く実施し好評を得ているが、未だ改良すべき点は多いと考えられる。本稿では、2010年に広島大学総合博物館で実施した企画展の来館者アンケートの結果を解析することで、来館者像を明らかにし、より効果的な広報活動や来館者のニーズに応える企画展示の提供など、今後の博物館活動で取り組むべき課題を明らかにしようとした。本稿の分析結果をもとに、今後の活動がより地域のニーズに即した形で発展することを期待したい。

**キーワード：**アンケート調査、企画展、広島大学総合博物館、来館者

### I. はじめに

今日の生涯学習社会においては、大学は「地域に開かれた高等教育機関」として、地域の学習活動に積極的に貢献してゆくことが求められている。中でも、一般公開施設である大学博物館は、大学が持つ知的財産を活用して、地域の多様な学習ニーズに応える重要な役割を担っている（文部科学省、1996）。

広島大学総合博物館（以下、総合博物館）でも、2006年の設立以来“常設展示”や“発見の小径（キャンパスの里山環境を利用した自然散策道）”など見学施設の整備に加え、“公開講演会”や“フィールドナビ（野外観察会）”，そして年に一度の“企画展”を実施して、大学の知的財産を社会に還元する活動を行ってきた。これまでのところ、常設展示へは年間約一万人が来館し、各種イベントも学内外の幅広い年齢層からの参加があり、学習の場として一定の支持を得ている（広島大学総合博物館、2007；2008；2009；2010）。しかし、さらに利用者の満足度の高い博物館活動を実現してゆくためには、現状を評価して課題を明らかにすることが有効であると考えられる。そこで、まず現状評価の手法として、展示、教育・普及面の評

価手法として適している来館者調査を行うことにした。これにより、展示や配布資料、広報など、博物館側から発信された各種情報が社会にどのように認知・受容されたのか、来館者を通してその成果を評価することができる（川嶋、2002）。また、来館者調査は活動への評価を公正にし、博物館関係者だけの自己満足としないためにも大変有効な手法である（大堀ほか、1996）。

本稿では、2010年度の第4回企画展で実施した来館者アンケートについて、結果のまとめと考察を行った。この企画展は『里山のめぐみー生物多様性を育む世界ー』と題して、2010年10月29日（金）から11月21日（日）まで、広島大学東広島キャンパスの大学会館一階大会議室を会場として実施された。目的は、里山をテーマにその豊かさと今日抱える諸課題を大学の研究成果をふまえて広く社会に発信することであった。また、会場となる東広島キャンパス周辺は大学移転前には地域住民の所持する里山であり、現在でもキャンパスの一部は里山環境として維持されている。このような経緯から、特に地域住民の来場を促し、大学の環境に対する取り組みを紹介することも重視し

た。展示内容は全学の幅広い研究分野の協力により編集され、「Ⅰ. 里山の自然」「Ⅱ. 里山の文化」「Ⅲ. 東広島の里山」「Ⅳ. これからの里山」の4つのゾーンに分けて、パネル・資料展示を行った。また幅広い世代が楽しめるよう、竹馬などの実際に体験できる展示“ハンズオン”も取り入れた。期間内の入館者数は、学内外から2,323人を数えた。

この企画展の目的や展示内容から、アンケートの結果では特に以下の3点に着目した。①どのような来場者が訪れているのか（来館者自身について）、②来館者はどうして企画展を知ったのか（広報媒体について）、③展示がどのように評価されているのか（展示評価について）。広報媒体については、かねてより効率的な広報活動が総合博物館の課題であったことに加え、本企画展では後述するように特別な取り組みも行ったためである。いずれも企画展の現状を評価する上で重要な項目であり、これを分析し、今後の博物館活動の改善に資することを本稿の目的とする。

## Ⅱ. 方法

本アンケート調査は、企画展への来場者に対して任意で実施した。用紙は会場の入口で配布し、出口付近に自由に記入・提出できるスペースを設置した。会期中の来場者2,323名のうち213名（9%）から回答が得られた。アンケートの項目は、問1~4は来場者自身について、問5は広報媒体について、問6~8は展示評価について（自由記述を含む）、問9~10はその他の意見・感想、博物館へ期待することについて自由記述とした（図1）。なお、問5は複数回答可とし、回答者の意見がすべて反映できるようにした。

## Ⅲ. 結果と考察

### 1. 来場者自身の属性

まず、来場者自身については、次のような結果が得られた（図2）。年齢では20歳代が約半数（48%）を占め圧倒的に多い。これに10歳代（13%）30歳代（9%）が続くが、大きな開きがある。また、所属は大学関係者（教職員、学生）が半数以上（63%）に上り、次いで一般が4分の1（24%）を占める。男女の比は男性（59%）が女性（41%）を上回っている。これらの結果から、来場者の大半が大学関係者で、かつ10代から20代が多かったため、当然のことながら大学生が多かったことがわかる。

### 2. 展示に関する情報の入手方法

展示の情報を入手したのは、通りがかり（117人）が51%と最も多く、知人から聞いて（40人）、掲示

チラシ（23人）が上位を占め、効果を期待していた新聞折り込みは6人とわずかであった（図3）。これらの結果と、会場が学生食堂に隣接する施設であることから、多くの来場者が昼食の際にすぐ近くで開催されている企画展のを知り、入ってみたという来場パターンが中心であったと推察される。今回の広報活動では企画展の目的の一つであった地域住民の来場を促すため、特別に地域新聞と大学近隣の自治体回覧板を合わせて約7万枚の折り込みチラシによる広報を行った。しかし、それだけの配布数に対して来場者数への貢献はきわめて少なかった。大学内を会場とした場合、学生や教職員の来場に期待できるものの、学外からの来場はよほど関心が高くなければ難しいようである。今回の場合、その対策として新聞折り込みを行ったが、十分な効果がなかったといえよう。とはいえ、東広島市を始め広島県内は博物館施設がそれほど多くなく、市民が博物館を利用する機会も限られる地域である。そのような条件下で一般の来場者を期待する場合、会場をどこにするか、学外に対し来場に至る強い動機付けをどのように与えるかなどについて、広報企画の段階から十分に検討し、集客に反映させてゆく必要があると思われる。

### 3. 展示に関する評価

次に、来館者の展示への評価をまとめた（図4）。展示に対する満足度は、「とても良い」（55%）と「良い」（44%）で大半を占め、未回答（1%）を除けば全回答が非常に高い評価となる。とくに「とても良い」が過半を占める点が注目されよう。展示ゾーン別の評価（図5）を比較すると、圧倒的に「里山の自然」（121人）が多く、「体験型展示」（35人）、「東広島の里山」（20人）、「里山の文化」（12人）、「これからの里山」（5人）と続いている。最も高評価だった「里山の自然」では、全ての年齢層から広く支持を得ている。これに続く「体験型展示」は、竹馬などを会場で体験した20歳代以下の割合が多く、体験をしなかったと考えられる40歳代以上になると、評価されなくなっている。これらに対して、「東広島の里山」「これからの里山」を評価したのは、40歳代以上が高い割合を占めており、展示の好みに年齢別の偏りがあることが明らかになった。展示を理解するためには、ある程度の基礎知識が必要となるが、「里山の自然」ゾーンでは動物剥製が特に人気が高かったことから、基礎知識を必要とせず直接視覚で楽しめる展示ほど、より多くの来場者から支持を得たものと考えられる。裏を返せば、楽しむために基礎知識が必要になるほど、評価する人数が減少することになるのは当然の結果といえよう。



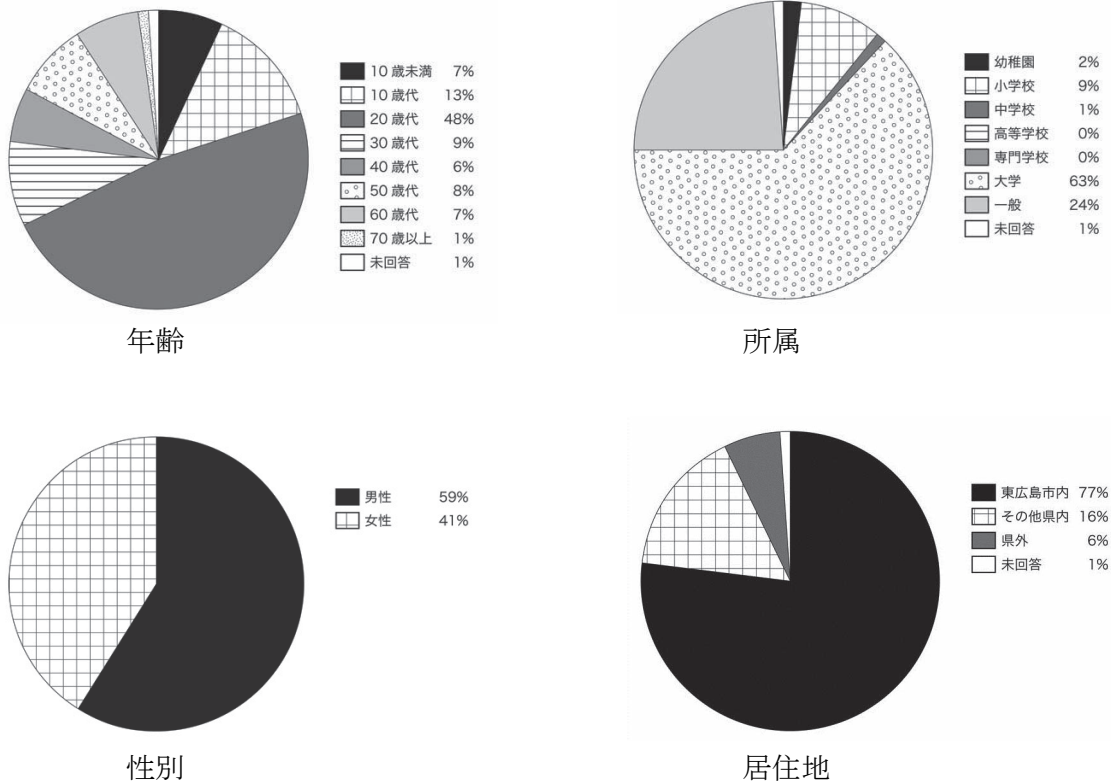


図2 来場者自身についての設問に対する回答

資料：2010年度企画展会場で実施のアンケート調査による。

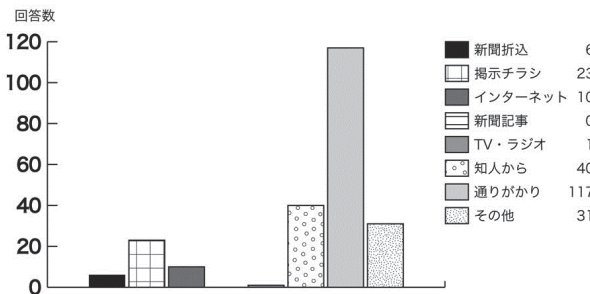


図3 広報媒体についての設問に対する回答

注：設問「どこでこの企画展を知りましたか？[複数回答可]」  
資料：2010年度企画展会場で実施のアンケート調査による。

これらより、本企画展が好評価を得た理由としては、誰もが楽しめる一次資料から、大学博物館の特徴である研究に基づく高度な展示までを幅広く展示に盛り込み、来場者が自身の好みのレベルで見学ができたことが大きかったのではないかと考えられる。

難易度については「丁度良い」(61%)が半数以上を占めることから、大きな問題は無いと考えられる。これ意外は「やや難しい」(16%),「易しい」(15%),「かなり難しい」(3%),「かなり易しい」(2%)とばらつきが見られるので、難易度の設定は難しい。ただし、「やや難しい」「かなり難しい」と評価した来場者からは、アンケートの問9・10の自由記述で「展示

量が多すぎる」「文字が多すぎる」「字が小さくて読みづらい」などの回答が得られた。このことから、来場者は展示パネルを読む際の物理的なストレスにも難しさを感じていると思われる、これを解消することは展示の改善につながると考えられる。その他、クロス集計により、年齢階層との関係で難易度の評価を検討したが、特に有意な違いは見られなかった。また、興味深いことに、「かなり難しい」と答えた人も「かなり優しい」と答えた人も、同様に半数以上が満足度において「とても良い」を選択しており、難易度は必ずしも満足度と直接関係しないことに注意が必要である。

#### 4. 自由記述の分析

アンケートの問9・10への自由記述では、127人から感想・意見が寄せられた。

展示全体への感想は、「大変興味深かった」「思ったより楽しく見学できた」「今後も続けてほしい」「定期的実施してほしい」という、好評価が多く見られた。また「実物を見ることが出来て良かった」など、博物館の特徴である実物展示を評価する感想も多数あった。展示の内容については、多くが本企画展の目的に即して「東広島の自然を知ることができてよかった」「キャンパス内にこれだけの自然があることに驚いた」など、身近な里山環境に関心を寄せた感想であった。

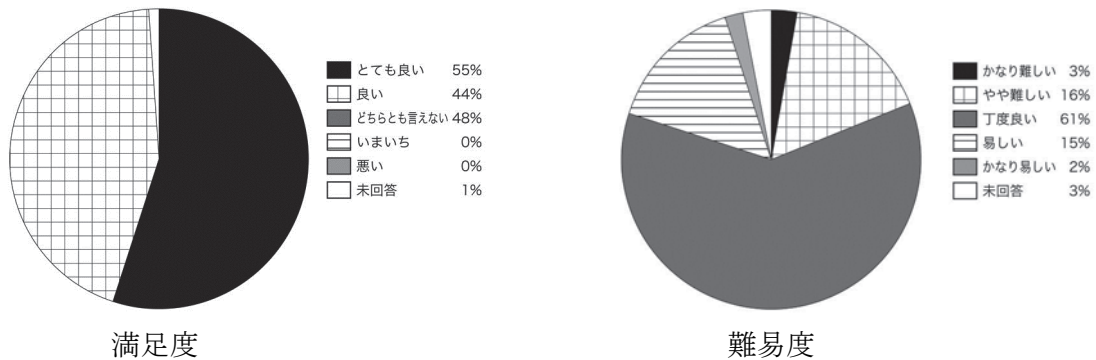
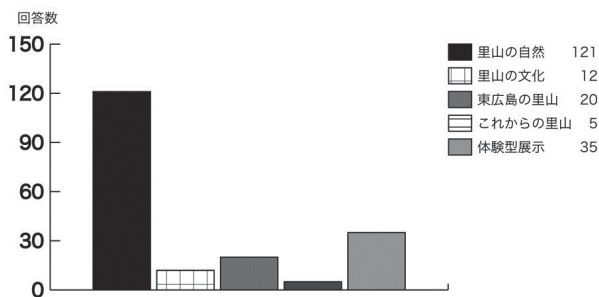


図4 展示評価についての設問に対する回答

資料：2010年度企画展会場で実施のアンケート調査による。

図5 印象に残った展示についての設問に対する回答  
注：設問「展示について、とくによかったもの(こと)をあげてください。[自由記述]」記述のあった展示について、ゾーンごとに集計した。

資料：2010年度企画展会場で実施のアンケート調査による。

さらに「大学でこれだけのことが出来ることに感心した」「多岐にわたる研究発表で、大変勉強になった」など、大学の研究に着目した来場者もいたことがわかった。一方、「自然と人間の営みを多面的にとらえていて良かった」と、学際的な展示を評価する感想がある一方で「土器と昆虫が混在していたので、狙いがよくわからなかった」と批判するものも少数あり、評価は分かれた。これらから、本企画展の展示とその内容は、概ね来場者の期待に答えていたと言える。

来場者から寄せられた意見のうち、改善点として挙げられたのはおよそ次の3点である。一番多数が、Ⅲ-2にある広報活動の不足を指摘するもので、展示への評価が高い分、もっと広く見てもらう努力を求める意見であった。「ぜひ学生に見てほしいので、授業での利用や小レポートを課すなど、ある程度強制的な手段をつかってほしい」との興味深い意見もあり、学外はもちろんだが、学内からの利用を促すことも検討すべきだと思われる。他は少数ずつだが、Ⅲ-3でも触れたパネルの容量や文字の大きさをより見やすく適切なものにするなど、具体的な改善案が得られた。

## 5. アンケート調査の反省

今回、アンケート調査を実施・分析する中で、調査項目や設問方法などにいくつかの不備が見出された。まず問2【所属】の選択肢「ようちえん・小学校・中学校・高校・専門学校・大学・一般」で、本来「大学」は大学生を意図していたが、大学の教職員が「大学」を選択する場合もあったようである。大学内を会場とした場合、来場者の多くが大学関係者であることが今回の調査でわかったため、まず大学関係者かどうかを大別した後、詳細な所属を問うことが必要と考えられる。次に問8～10では、回答方法を自由記述にしたことで回答率が著しく少なくなっていたことが分かった。特に問9と10は設問の意図が曖昧であったため、どちらか一方しか記述されないことがほとんどであった。ただし、自由記述で得られた感想・意見は来場者の考えをよく反映しており、有益なものが多いと思われる。よって、問の性質に合わせて回答方法を吟味することが重要であると考えられる。

これらの不備により、今回のアンケート調査が回答者にとってやや回答しにくい面があったことは認めざるを得ない。次回の調査では、今回の反省点を活かしてより正確な分析ができるように調査票を改善したい。

## IV. おわりに

本稿は、広島大学総合博物館の企画展を来場者アンケートにより客観的に評価した、本博物館では初めての試みである。概要に限られた調査ではあるが、今後の企画展での検討課題がいくつか明らかになったことは意義ある結果といえよう。本稿が、これまで取り組んできた活動をより計画的に改善し、総合博物館を地域のニーズにあった学習施設へと改善する一助となれば幸いである。

**【付記】**

本報告に関するアンケート調査を行う上で、広島大学総合博物館のスタッフより有益な助言を得た。皆様に厚くお礼申し上げます。また、会場での解答用紙の配布・回収にご尽力くださった企画展学生スタッフの皆様、アンケートにご協力くださった全ての方々に、心より感謝申し上げます。

**【文献】**

- 大堀 哲, 小林達雄, 端 信行, 諸岡博熊編 (1996): 『ミュージアム・マネジメント 博物館運営の方法と実践』東京堂出版。
- 川嶋-ベルトラン 敦子 (2002): 来館者調査を計画・実施する一調査の枠組みと実施上の留意点一. 村井良子編: 『入門ミュージアムの評価と改善』株式会社アム・プロモーション, 131-148.
- 広島大学総合博物館 (2007): 『広島大学総合博物館ニュースレター HUM-HUM Vol.1』.
- 広島大学総合博物館 (2008): 『広島大学総合博物館ニュースレター HUM-HUM Vol.2』.
- 広島大学総合博物館 (2009): 『広島大学総合博物館ニュースレター HUM-HUM Vol.3』.
- 広島大学総合博物館 (2010): 『広島大学総合博物館ニュースレター HUM-HUM Vol.4』.
- 文部科学省 (1996): 『生涯学習審議会 (答申) 地域における生涯学習機会の充実方策について』.
- (2011年8月31日受付)
- (2011年11月18日受理)